

特集 感情心理学の応用

感情は、心理学の創始期には重要なテーマとしてとりあげられた。構成主義のヴントは、意識される感情経験の構造に着目し、組織的内観により感情を快と不快、覚醒度、緊張と緩和の三次元であると主張した。これは今日の感情の次元説の出発点である。一方、機能主義のジェームズは、意識される感情と行動との関係を問題にし、我々の感情経験には身体的な表出活動のモニターが不可欠に役割を果たしていると指摘し、感情の末梢フィードバック説を唱えた。これは脳科学者ダマジオの提唱する感情のソマティック・マーカー説の先駆である。

心理学の創始期における感情研究は、ゲシュタルト心理学、行動主義と続く、特定の手法と原理に基づいて心理学という独自の体系を形成しようとする学派の時代の心理学では、ほとんどテーマとしてとりあげられなかった。心理学は1960年代の認知革命で、学派の時代を終え、心への学際的なアプローチが行われる新しい時代を迎えるが、認知が研究の中心で、脳や、身体、意識、社会・文化が複雑に関係する現象である感情は、なかなか研究対象とはならなかった。心理学において感情研究が盛んになるのは、ようやく1980年代後半になってからである（雨宮2005）。

心理学は、ヴント、ジェームズの時代から、学派の時代、認知革命を経て、一世紀たち、ようやく感情という多面的で、臨床心理や健康、社会関係など広範な応用領域をもつ現象の解明にとりくみ始めたといえるだろう。20世紀の科学は、学派の時代の心理学におけるように、身体、心、社会・文化を別々に扱ってきた。21世紀になってようやく、これら相互の結びつきが、しだいに形成されるようになってきた。遺伝子と脳、脳と心、心と文化・社会、それまで別々に進んできた研究が照合され結びつけられ、まるで魔法のように心についての大きな描像が次々と描かれ始めた時代に我々はさしかかっている（Haidt, 2006）。感情心理学の復活は、こうした心に関する科学の新しい動きを背景としたものである。

本特集は、2006年度の社会学部学部共同研究「感情心理学の応用」からの報告である。

雨宮による「色眼鏡着用による気分変化についての予備的実験」は、感情に関しては比較的単純な問題を対象にしている。色光の気分効果については、防犯やダイエットなど応用が着目されているが基礎研究がほとんどないので、その欠落をうめることを目的としたものである。気分の構造としては、覚醒度と快不快の二次元を採用している。清水らによる「感情的表現測定によるBig Five測定の半年間隔での安定性と変動」、「Rosenberg自尊感情尺度のモデル化」、「大学生のEmotional Intelligence Scale (EQS) の構造とモデル化」は、ビッグファイブ（情動性、外向性、誠実性、協調性、開放性）、状態不安と特性不安、

自尊感情、情動知能（自己洞察、自己動機付け、共感性、愛他心、対人コントロール、状況洞察、リーダーシップ、状況コントロール）といった、感情と密接に関係する人格特性の構造と相互の関係といった複雑な問題の解析を、共分散構造分析を駆使することによって試みている。飯田らによる「クオリティ・オブ・ライフ（QOL）の評価——自己記入式QOL質問表（QUIK）及び改訂版（QUIK-R）の文献的展望——」では、公衆衛生をふくむ非常に幅広い観点から、飯田らの開発した尺度を中心に、クオリティ・オブ・ライフを測定する質問紙が紹介、概観され、患者の立場からの医療が提唱されている。久本の「行動、思考から注意へ——行動療法の変遷とマインドフルネス（Mindfulness）——」では、行動療法における問題行動の修正、認知療法における認知の歪みの修整を経て、新しい治療法として注目されているマインドフルネス・アプローチが紹介されている。これは行動や認知ではなく、注意に焦点をあてた実践である。瞑想と気づきという古来のアプローチが復活し情報処理モデルの適用が試みられるなど、まさに古くて新しいテーマである感情を象徴する内容になっている。

学部共同研究を担当した四人の心理学者が中心となり、認知、心理測定、精神医学、臨床心理学とそれぞれの専門領域から、感情とその応用にとりくんだ成果を取めた、本特集が感情心理学に関心をもつ人の何らかの参考になれば幸いである。

雨宮 俊彦

雨宮俊彦 2005 感情科学の展望(1) 感情と感情科学の位置について、, 関西大学社会学部紀要、36 (3), 3-59.

Haidt, J. 2006 *The Happiness Hypothesis*, Harper & Row.

本特集号は、平成18年度学部共同研究費で行った研究の成果である。